

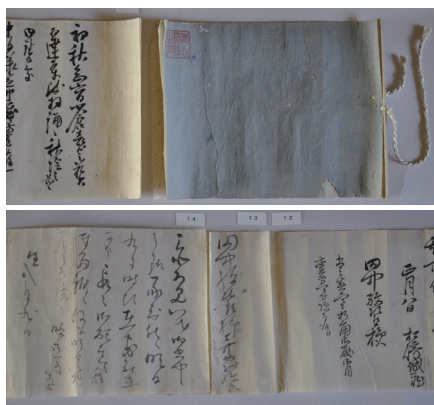
守り、伝える

巻子装の書状を修理

紙の折れを防ぐ技術が光る

令和5年度、巻物状に仕立てられた巻子装の書状の修理を行いました。この巻子には、幕末に活躍した久留米藩士・松崎誠蔵や今井栄らによる書状がまとめられています。同様の書状類を収めた巻子は5巻あり、今回はそのうちの一つを修理しました。

巻子は全長が7m以上で、10通24紙から成ります。修理前は、紙の継ぎ目が外れている箇所が多かったため、保存活用に適さない状態でした。



紙の継ぎ目が外れて本紙同士が分離していた

また、本紙を補強する裏打ち紙はほぼ外れており、本紙の折れが多数発生していました。

《修理のここがおもしろい》

本紙の順序が崩れないように並べ、継ぎ直した後に、継いだ本紙全体に裏打ちを行います。裏打ちによって、本紙を補強するだけでなく、折れ皺の大部分を目立ちにくくすることが出来ます。これは、糊の水分で皺が伸ばされるためです。

折れが残っている箇所や、折れが発生しそうな箇所には、折り伏せ（補強紙）を入れます。糊を溶いた水で湿らせた和紙を、3mmほどの細さに裂いて、該当箇所に一本ずつ入れていきます。この細かな作業が、7m分地道に行われます。



一本ずつ折り伏せを入れている様子
紙の裏からライトを当てて補修箇所を確認する

180年前のからくり人形 点検して技術守る

久留米市では、江戸時代の久留米城下町出身の発明家田中久重（1799～1881）が製作したからくり人形2体を所蔵しています。弓曳き童子（市指定文化財）と文字書き人形です。

いずれも製作から約180年が経過し、今後も保存活用していくためには、年に1回、専門の人形師による点検と調整が必要です。人形の緻密な内部構造を取り扱う、繊細な作業の一部を紹介します。

《弓曳き童子》

右手親指、右腕、首の動作や、糸の強度などを確認します。右手親指

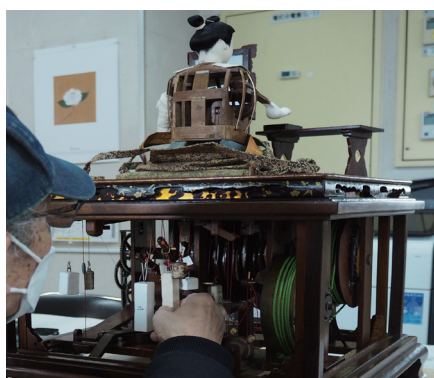


衣服の下に隠れた糸の緩み具合を確認する
木製の部品には「ハ」「ニ」「ホ」と文字が振ってある

は、爪楊枝ほどの細さの矢を確実につかめるよう、動作の調整をします。糸は、人形が座る台下にある歯車と連動することで、滑らかに繊細な動きを生みます。糸の一部が緩んだり張ったりしていると、人形が正常に動かなくなる場合があります。糸の確認は重要な点検項目です。

《文字書き人形》

文字を書く右手の取り付け部分と、人形が書いた書体の確認を行います。書体にずれがある場合は、歯車を作動させるための引き紐や、錘の糸を調整します。このとき、隣り合う糸が絡まないように注意します。この作業により、右手の動きが微調整され、きれいな文字が書けるようになります。



錘を下に引きながら糸を調整していく
錘と連動する歯車がいくつも据えられている